

「グリーンロジスティクスを促進させる評価手法の構築」

報告者 加納 寛之

(亜細亜大学大学院経営学研究科 博士後期課程)

1. はじめに

今日、環境問題への対応、とりわけ二酸化炭素（CO₂）の排出削減に取り組むことは企業にとって必要不可欠なものとなっている。しかし各企業における取り組みの状況には温度差が生じている。CO₂削減にかかわる技術やノウハウを競争優位の源泉とみなし、積極的に推進する企業が存在する一方で、法令や規制の遵守にとどまり、積極性に欠ける企業も存在する。後者が積極的に取り組むことができない要因の一つとして考えられるのが、環境対策の持つ効果が不明確であるという点である。環境負荷の削減にかかわる取り組みは多岐にわたるが、どの取り組みをどの程度進めていくことが必要なのかという判断は、各企業に委ねられている。こうした状況で、厳しい価格競争やコスト圧縮の要求にさらされている企業では、効果が不明確な環境対策は追加的な負荷とみなされ、積極的な取り組みは敬遠される。

このような問題を解決していくためには、業種や規模に応じて求められる環境対策の内容や程度を示す指標が必要となるとともに、その取り組み状況を評価し、取り組みを改善・向上させていくことが必要である。そこで筆者は本学会 第 42 回全国大会において、環境対策の取り組み状況を環境報告書を用い評価する手法について報告を行なった。今回はその手法を発展させ、多岐にわたる環境対策の取り組み間の関連性や、経済的指標との関係性について探索を進めてきた過程を中心に報告を行う。

2. これまでの試み

第 42 回全国大会では、輸送事業者向けの環境対策チェックリストを基に、企業の環境対策の状況を判定するキーワード群を設定し、各企業から発行されている環境報告書から抽出されたテキストデータとのマッチングを行い、企業の環境対策の取り組み状況を明らかにする手法について報告した。しかし、この手法は業種ごとの取り組みの傾向を明らかにするにとどまり、取り組み間の関連性や、経済指標との関係性を明らかにするには至らなかった。より広範の企業の取り組み状況を明らかにするために環境報告書を用いることが、その性質上困難であったためである。

そこで今回の報告では、特定の企業の取り組みの変遷に着目し分析を進めることで、環境対策間の関連性や経済指標との関係性について明らかにするとともに、それを基とした評価手法の構築を検討していく。